



名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより10月号 '11

今月の予定

聖歌練習 ちょっと速いですがクリスマスの練習も

名古屋:10月9日代式後

- ・初心者の方、自信のない方のための基礎練習
- ・主日聖体礼儀後、ワンポイントレッスンを行います。
- ・毎主日朝、発声練習をしています。ご参加よろしく。

半田:10月5日(水)12時ごろから

名古屋指揮当番

2日ピーメン松島 16日マリア松島 23日30日エレナ広石

ズナメニイ研究会

10月27日(金)十字架挙栄祭聖体礼儀後。

グレゴリオチャントが西洋宗教音楽の原点であるように、ズナメニイはロシア聖歌の原点です。ズナメニイを知ることによってビザンティンとの連続性をとらえ、合唱音楽へと発展したロシア聖歌の底にある正教会聖歌の本質をさぐります。また日本語でズナメニイを歌ってみて、古聖歌の魅力を体感してみます。

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/Znameniy/chant.htm>

知って祈ろう — 奉神礼・聖歌入門

聖書の読み— 預言の書、使徒の手紙、福音

「聖体礼儀」は他教派では聖餐式(プロテスタント)、ミサ(カトリック)と呼ばれますが、伝統を大切にする教会だったら、どこの教派でも聖書の読みとパンとぶどう酒を献げる感謝の儀式が礼拝の二つの柱になっています。

聖書の読みは、ユダヤ教の会堂で旧約聖書が読まれていたのに端を発するとも言われ、かなり早い時代から行われていました。

2世紀の護教家ユスティノスは次のように述べています。

「太陽にちなんで呼ばれる日[日曜日]に、町や村に住む私たちの仲間は、皆一つの所に集まり、時間の許す限り、使徒の記録、あるいは預言者の書物を読む。朗読者が読み終わると、司会者(司祷者)が、これらの美しい教えを学ぶよう勧め、励ます話をする。」

もちろん、このころは今よりもずっとシンプルな礼拝でした。ビザンティン時代になってからは、アンティフォンを歌いながら聖堂への行進が行われ、今の「小聖入」は実際の聖堂への入堂式でした。現在の聖体礼儀の冒頭の大連祷やアンティフォンはビザンティン後期になってから聖堂内の儀式として付加されたものです。また、正教会では旧約聖書の読みは短い聖詠、すなわちポロキメンへと縮小されましたが、カトリックや聖公会では今も新約聖書に先立って旧約聖書が読まれています。

聖書は教会の中で生まれ、読まれ、解説されてきました。奉神礼やほかの聖伝とともに働いて、ハリストスの福音を明かし、人々をハリストスの生命に導き、一致させます。



アンボン

ギリシア教会では、昔ながらのアンボンを見かけることがある。左の写真はテサロニキのアヒロピートス教会。輔祭は聖堂左側のアンボンで福音を読んでいた。聖堂を埋めつくす多くの会衆に福音書や説教がよく聞こえるようにと考え出されたステージで、古くは旧約聖書(ネヘミア8:3)にも登場する。西方教会では説教壇として発達する。下はビザンティン時代のアンボンの絵。



ポロキメンあれこれ

普通のポロキメンは誦経者の読みに続いて、聖歌隊は2回半繰り返しますが、復活祭や五旬祭などの大きな祭の晩課には「大ポロキメン」が行われ、4回半繰り返します。従って、誦経者の読む聖詠の句も通常は1個ですが、大ポロキメンでは3つあります。

日本では土曜日のポロキメンも普通のポロキメンのように2回半の繰り返しで行われていますが、祈禱書通りに行うと、大ポロキメンの形です。

(誦)*主は王たり、彼は威厳を衣たり

(詠)主は王たり、彼は威厳を衣たり

(誦)「句」主は能力を衣、又之を帯にせり、

(詠)主は王たり、彼は威厳を衣たり

(誦)「句」故に世界は堅固にして動かざらん、

(詠)主は王たり、彼は威厳を衣たり

(誦)「句」主や、聖徳は爾の家に属して永途に至らん

(詠)主は王たり、彼は威厳を衣たり

*日本では一般的に司祭が行う。

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料

聖歌の伝統 J.V. ガードナー著 「ロシア正教会の聖歌」から

ガードナーの『ロシア正教会の聖歌』は世界中で広く読まれている正教会聖歌の入門書です。ここでは現代日本の状況に合わせて適宜省略、解説を加えてご紹介しています。表はカリストス主教のFestal Menayonを参考にしました。

早課 3. 特別な早課 復活祭早課

復活祭の早課は形式的にも構造的にもほかの早課と全く異なります。早課に先だって十字行が行われ、主日のスティヒラの一つ（6調の挿句のスティヒラ）「ハリストス救世主や」を歌いながら聖堂を回ります。早課は聖堂の外、閉じた門の前で始まります。

1. 始まりの祝福の後、教役者は復活祭のトロパリ「ハリストス死より復活し」を3回歌う。聖歌隊と会衆は繰り返す。司祭は第67聖詠の第4句（神は興き）を歌い、各句に応じて復活祭のトロパリを歌う。最後に司祭はトロパリの前半を歌い、聖歌隊は後半を歌う。司祭は手持ち十字架で聖堂の門を叩き、門は内側から開く。行進は聖堂内に進みトロパリを歌い続ける。
2. 大連祷
3. 復活祭のカノン、イルモスもトロパリも両詠隊が交互に歌い、各歌頌の最後のイルモス（カタワシャ）は両詠隊が一緒に歌う。各カタワシャのあと復活祭のトロパリが3回繰り返され、小連祷が続く。
4. カノン全部をこのように行う。各歌頌毎に小連祷がある（通常のように歌頌グループつまり1、3歌頌の後、4、5、6歌頌の後、7、8、9歌頌の後ではない）、「我が心は主を崇め」の代わりに第9歌頌の歌に短い讃美の附唱（ヒポフォン）をつけて歌う。第3歌頌の後イパコイ、第6歌頌の後コンダクとイコス、につづき復活の歌「ハリストスの復活を見て（主日早課12参照）」と復活のスティヒラ3回が歌われる。
5. エクサポスティラリ（3調）
6. 讃揚歌（第147、149、150聖詠）と1調の4つのスティヒラを両詠隊が交互に歌う。
7. 5つの祭的な「パスハのスティヒラ」両詠隊は聖堂中央に集まって歌う。最後は復活祭のトロパリを何度もくりかえす。
8. 「聖金ロイオアンの復活祭の説教」を普通の話し方の口調で、荘厳に読む。読みがおわったら聖金ロイオアンのトロパリを歌う。
9. 祭日早課の連祷
10. 終わりのやり取りに続き復活祭のトロパリを何度か歌い、発放。発放詞の終わりは特別の句「我等にも永遠の生命を給えり……」で終る。

復活祭早課の中心はカノンです。通常の早課の前半部分は全部省かれ、いきなりカノンから始まります。つまり徐々に緊張が高まってゆくのではなく、一気に高いポイントから始まります。音楽的見地からみれば、カノンの音楽そのものはシンプルで、一、二種類の簡単なメロディが何度も繰り返されます。この高揚感には礼拝上のほかの要素によっても高められています。たとえば司祭は何度も炉義を行い、全参拝者は灯したろうそくを持ち、パスハの挨拶「ハリストス復活！」「実に復活」が繰り返されます。二つの詠隊がある場合は左右交互に歌われます。

のぼりつめていた高揚感が一息つくのはエクサポスティラリで、静かな美しい旋律によって緩和の時もたらされます。しかしこのあと、またすぐ、讃揚歌（「凡そ呼吸あるもの」）、復活スティヒラ、パスハのスティヒラへと続き、ふたたび盛り上がったまま「金ロイオアンの説教」へと進んでいきます。復活祭では通常は誦経する部分もすべて歌われます。

